

両脇侍を伴う宝冠阿弥陀如来像に関する考察

—鎌倉英勝寺阿弥陀三尊像龕を中心に—

清泉女子大学 平野 智子

頭上に宝冠を戴く姿であらわされた、「宝冠阿弥陀如来像」と総称される一群の阿弥陀の異形像がある。これらは光森正士氏の一連の研究により、真言系紅頗梨秘法本尊、天台系常行堂本尊の二種の機能に大別され、前者は独尊、後者は五尊構成の中尊として造像されるものと理解されてきたが、現存作例中には両脇侍を伴う三尊形式をとるものが彫刻・絵画ともに数例みとめられる。そのうちで古例に属する彫刻作例として、鎌倉英勝寺阿弥陀三尊像龕と広島耕三寺浄土曼荼羅刻出龕中の三尊とがあげられる。これらにあらわされる宝冠阿弥陀如来像は、両脇侍を伴う点とともに、髻を結い上げる頭部の形状だけでなく、衲衣ではなく条帛・裙を着ける着衣形式も菩薩通形のものである点が注目される。本発表は、前者英勝寺像を中心に、後者耕三寺像も援用しながら、その図像的性格を明らかにする試みである。

英勝寺三尊龕製作時期は、中尊の台座の形式に平安初期彫刻に通ずる古様がみられるものの、各像の様式などから、11世紀初頭が想定される。耕三寺仏龕は、これに遅れる時期の製作とみられるが、三尊の周囲を右繞礼拝する十体の比丘形があらわされ、これが常行三昧を修行する様相をしめすとする指摘があることが注目される。耕三寺像の図像から導かれる天台常行堂本尊の形式について諸史料と先行研究を再検討すると、叡山東塔常行堂に由来する金剛法・利・因・語の四菩薩が随侍する密教系五尊、叡山横川常行堂に由来する観音・勢至・地藏・龍樹の四菩薩が随侍する顕教系五尊の二種が並存するとともに、観音・勢至菩薩を両脇侍とする阿弥陀三尊像の例も、長保4年(1002)解脱寺常行堂や永万元年(1165)広隆寺常行堂にみとめられる。

初期天台において宝冠阿弥陀は図像上重要な機能を持っていた。この期の稀有な作例である滋賀向源寺(旧渡岸寺観音堂)十一面観音菩薩立像の、いわゆる頂上仏面としてあらわされた五智宝冠を戴く菩薩相を宝冠阿弥陀とみれば、その象徴性が明らかである。英勝寺像のような、両脇侍を立像とする伝統的如来三尊の中尊を菩薩形の宝冠阿弥陀とする図像にも同様の意図がうかがわれよう。

宝冠阿弥陀と呼ぶべき作例の中には、衲衣をまとった通常の如来像の着衣形式をとるものも少なくないが、これに比べれば英勝寺像や耕三寺像の菩薩形の着衣は大日如来像を連想させる意図がみられるといつてよい。耕三寺像の脇侍坐像形式は、英勝寺像とは異なり、曼荼羅諸尊を連想させる、より密教的なイメージである。こうした図像上のさまざまな腐心は、平安時代前期を濫觴とし、鎌倉時代以後にまで及ぶものである。

ともあれ、英勝寺像のような、宝冠阿弥陀に観音・勢至の両脇侍菩薩が随侍する阿弥陀三尊像は、11世紀初頭の段階における天台常行堂本尊の一形式であった可能性が高い。その図像の背後には、平安時代仏教における顕密融合という根本的な問題があるとみられる。